

【別添資料①】

ひとりひとりの「聞こえ」。

- ・ビューティフルハミングバード
- ・聞き手・文：菊地 崇 (JMFA会長)
- ・抜粋：日本ミュージックフェスティバル協会オフィシャルサイト



—— 「あなたのための音」を届ける音楽コンテンツとして今年スタートした『音聞』。2月に初の公開イベントが開催されましたが、ビューティフルハミングバードがそのイベントに出演なさいました。「音のバリアフリーを」という『音聞』について、最初はどのように思いましたか。

光子 聞こえ方について考えてみるっていうことを一緒にやってみたいなって思いました。今まで自分たちがいろんな場所でライブをやってきて、出ている音が自分たちの音楽を聞くには大きすぎるんじゃないかって思ったこともありますから。

—— 確かにステージに立っていると、オーディエンスがどう聞こえているのかわからないことも多いと思います。

光子 実は2016年くらいから、なんとなく耳の調子が悪いなって感じるようになって。それに気づいたのはアジアツアーに行っていたときだったんですけど、短期間で飛行機に

何度も乗っての移動だったから、気圧の変化で調子が悪くなったのかなって思っていたんです。現れては消えるみたいなことがずっと続いていて、そのうち耳の不調とともに、発声の不調も出てきてしまったんです。

—— 聞こえにくくなったことで、自分の思うように歌えなくなったということですか。

光子 いざ自分がそうになってしまうと、意外に手の施しようがないというか。どうしたらいいのかわからなくなって、声の病院の先生に相談したら「耳管が開いたままの状態になってしまう耳管開放症だろう。耳の専門の先生に診てもらったほうがいい」と紹介してくださって。それが2年前くらいのことです。

—— 『音聞』のイベントの際も、難聴の方が参加なさっていました。

光子 その難聴の方とイベントが終わってからお話したんですけど、音楽が好きと仰っていて。「ライブにすぐ行ってみたかったけど、行っても楽しめるかどうかわからないので参加したことがなかった。今回は『聞こえ』について考えるイベントだったので来てみました。そしてライブって楽しいって始めて感じられました」と。

—— そういう声って嬉しいですね。

光子 すごく嬉しかったですね。集まったみなさんが「聞こえ」についてみんなで考えてみようという雰囲気に包まれていたからこそ、その方も楽しい気持ちを持って帰られたんだと思います。みんなが同じじゃない。耳の不調とか聴覚障害がある人もいるんだってことを知っているだけでも、会場の雰囲気って変わるかなって。そのふんわりした何かが、当たり前のようにいつもあればいいのになって思います。

—— いろんな人が同じところにいて音楽を楽しめる。それがライブでありフェスなんだと思います。みなさんが許容し共有する場所。

光子 ちっちゃい子もいるしお年寄りもいる。そんなライブって本当にいいと思いますね。イヤーマフについても、最初は「あれ、あの子は何をつけているんだろう」って思っていたんです。だけれども大きな音は子どもにとって良くないから、イヤーマフは耳の保護のためなんだってことを知って。知ることで、「耳は守らなきゃいけないものなんだ」とか「大きな音じゃないほうがいい人もいるんだ」っていうことを想像できるようにもなれると思うんです。

【別添資料②】

誰もが楽しめる音楽の場づくりへの想い。

・草刈愛美(サカナクション)

・聞き手・文:菊地 崇(JMFA会長)

・抜粋:日本ミュージックフェスティバル協会オフィシャルサイト



—— 「フジロック」をはじめ、子どもが楽しめる場所が用意されているフェスが増えてきています。

草刈 福井の「ワンパーク」もそうでしたね。子どももすごく楽しんでいました。ステージが見える場所にキッズエリアがあって。そこで遊んでいる最中に「あ、羊文学だ」ってライブを見たり。私自身も一緒にフェスを楽しんでいる感覚があって、すごくうれしかったんです。自分では興味あるライブを聞きに行きたい。子どもは野外の広い場所で遊ぶ。今までに出会ったことのない体験、出会ったことのない味。そんなちょっと非日常的な時間を過ごせることって楽しいですね。

—— サカナクションのライブも、フェスに近いというか、みなさんが楽しめる空間に移行しているように感じています。

草刈 最初はロックバンドとして、ライブハウスの数百人のなかで走り出しています。お客さんも元気のいい同世代。そういう人たちとのコミュニケーションからスタートしているのですが、ありがたいことに、どんどんお客さんの人数とともに幅も広がってきています。15年以上もやっているのも、お客さんも一緒に年齢を重ねているわけですから、子育てをしている方も増えてくる。ライブでは会場にいる全員と対面しているので、お客さんがどうなっているのかというのは、身体で感じながらずっとやってきていますから。

——それが親子席にもつながっているのですか？

草刈 フェスもそうなんですけど、子どもがいても安心して楽しめる場所、逃げ場があるとか見やすい場所があるライブが増えてきていると思います。今回のツアーでは、新たな試みとして会場保育サービスをするんです。この2年間のライブを休む前には、ライブで子どもを預かるという発想自体ありませんでした。どんどんお客さんも多様化しているし、ライブは誰もが楽しめる場であってほしいと思っています。私もそれに協力できることがあれば、どんどんしていきたいと思っています。

——親子席にしる会場保育サービスにしる、ライブに小さな子どもを連れていっていいと思ってもらえるだけでも大きな進歩だと思います。

草刈 母親になってから、例えば夜にご飯を食べにいくことすら気にかけるということがあります。私の友達にも私たちのライブに行きたいけれど、小さな子どもがいるから行けないとか。保護者の方が自分の楽しみを断念してしまう。みなさんが、自分の意志じゃないところでライブに行けなくてという状況を減らすことができたらいいなと思います。

——今回のツアーでは、子ども用イヤーマフの無料貸し出しも行います。

草刈 耳が気になって検査に行ったことがあるんですね。そのときに、一度悪くなってしまった内耳の細胞は元に戻らないということを教えていただいて。自分の耳だけではなく、お子さんの耳も守っていただけたらと思っています。

——ライブ会場での、みなさんが楽しめるための様々なアクションが次のステップにつながっていくといいですね。

草刈 私たちとしてもこれからなので、やってみることでいろいろと見えてくることもあると思います。みなさんが楽しめる音楽の場を作ること。それを一緒に追いかけていけたらなって思います。

【別添資料③】

子どもたちの耳を休ませること。

- ・水足邦雄 (防衛医科大学校／医学博士)
- ・聞き手・文:菊地崇(JMFA会長)
- ・抜粋:日本ミュージックフェスティバル協会オフィシャルサイト



WHOが騒音に対するファクトシートを最初に出したのが2018年でした。日本や欧米諸国だけではなく、いわゆる発展途上国も含めて、スマートフォンの普及率が高くなり、イヤホンやヘッドホンで音楽を聞き続ける人が多くなっています。スマホで音楽を聞くというレクリエーションによる音によって、世界中で何十億もの人の耳が危険にさらされているというこのファクトシートを受けて、世界でいろんな動きが起きたんです。代表するひとつがiPhoneで、ヘルスケアの項目に「聴覚」が加わったのが2019年です。

例えば職域での騒音については、85デシベルの音がある状況だったら耳栓かイヤーマフをしないとというガイドラインが厚労省から出されています。

——iPhoneの「聴覚」を見ると、ロックコンサートは110デシベルあると。

コンサートの場合は、いろんな楽器からいろんな音が出ているので、トータルのエネルギーとしてはかなり大きなものとなっています。コンサートに行って音楽を楽しむということは、そのエネルギーを耳が受けちゃうということです。エネルギーを受けることで、耳の外毛が壊れてしまう。そもそも耳は、繊細な音を聞き取れるように微細な構造をしているんです。強い刺激を受けて働きが悪くなっている状態が、耳のなかで「ピー」となっている状態。いわゆる耳鳴りです。

勝手に耳のなかで音が作られちゃっているというのは、故障する一歩手前の状態なんです。子どもに対して気をつけなければならないのは、子どもは耳鳴りをあまり気にしないっていうか、耳鳴りがあったとしてもケロッとしている場合が多い。脳がすごく柔らかいので、その状態に適応しちゃう。大人と子どもに同じアンケート調査をしたら、圧倒的に耳鳴りに対しての子どもからの訴えが少ない。自分から言い出さないんですね。

もちろん人によって違いはあるのですが、子どものほうが小さな音まできれいに聞こえています。20代後半から加齢による難聴は始まっています。ですから10代のときと40代や

50代になったときでは、同じように聞こえているわけではないんです。耳のなかにあるカタツムリのような部分、蝸牛（かぎゅう）という部分なんですけど、生まれたときに完成していて、成長することはないんです。鼓膜の大きさも生まれたときに決まってしまう。音を感じる有毛細胞も再生はしない。生涯にわたる騒音の蓄積によって、聞こえは悪くなっていきます。だからこそ小さな頃から大きな音はできるだけ避けたほうがいいんです。

音楽のある暮らしっていうのは、すごく豊かな暮らしだと思います。だからこそ耳を消費するだけではなく、長く楽しめるようにすればどうすればいいのか。これからの時代、さらに音が溢れるかもしれない。未来がある子どもだからこそ、子ども時代から耳を休ませることが大切なんです。音を感じるための細胞に再生力がないのですから。

【別添資料④】

・アンケート集計結果

ミュージックフェスティバル会場でのイヤーマフ貸し出し利用者に対するアンケート。
回答者数213名（2024年1月～2024年11月までの累計）

【アンケート集計結果】

ミュージックフェスティバル会場でのイヤーマフ貸し出し利用者に対するアンケート。
回答者数213名（2024年1月～2024年11月までの累計）

■ 親年齢

25歳～29歳	2%
30歳～34歳	8%
35歳～39歳	27%
40歳～44歳	39%
45歳～49歳	21%
50歳以上	4%

■ フェスやライブにおけるお子様の聴覚保護について

どの程度問題意識をお持ちでしたか。

とても持っていた	29%
少し持っていた	59%
持っていなかった	12%
未回答	0%

■ イヤーマフをレンタルしてみた感想をお聞かせください。

とてもよかった	77%
まあよかった	21%
あまりよくなかった	2%
未回答	0%

■ イヤーマフを使ったお子様の感想をお聞かせください。

とてもよかった	63%
まあよかった	28%
あまりよくなかった	8%
未回答	0%

■ こういったお子様向けの貸し出しサービスは必要と思いますか？

必要	99%
どちらともいえない	1%
必要ない	0%

■ 今後イヤーマフを買ってみようと思いますか？

はい	27%
検討したい	61%
いいえ	13%
未回答	0%